博文館刊『生活』の性格と位置づけに関する考察 ：大正期のマスメディアがとらえた「生活」と〈中流〉の一側面

著者	久井 英輔
雑誌名	ノートルダム清心女子大学紀要．外国語・外国文学編，文化学編，日本語・日本文学編
巻	41
号	1
ページ	51-65
発行年	2017
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000006/

博文館刊『生活』の性格と位置づけに関する考察
── 大正期のマスメディアがとらえた「生活」と〈中流〉の一側面 ──

久井　英輔※

A Study on Peculiarity and Positioning of *Seikatsu* Published by Hakubunkan:
An Aspect of "Life" and "Middle Class" Grasped by the Mass Media in the Taisho Era

Eisuke HISAI

Seikatsu was a monthly journal published in the early period of the Taisho era by Hakubunkan, which was one of the most famous publishers in the Meiji era. The title of the journal, *Seikatsu*, simply means "life" in Japanese. This article analyzes the circumstances of the launching of this journal and its contents in order to clarify how this journal tried to grasp people's "life" in the Taisho era.

Hakubunkan started to issue *Seikatsu* in order to appeal to many readers, because Hakubunkan had come to hold a subordinate position to new competitors since the last years of the Meiji era. For Hakubunkan, "life" is a key concept to cope with the change of readership at that time.

The existence of *Seikatsu* suggests that we can find different ways of approaching people's lives by the mass media in the Taisho era. We have already known that journals for women at that time in Japan placed emphasis on the life style of the new middle class. On the other hand, *Seikatsu* referred to various classes and their styles of living. However, this policy of editing caused difficulty in the sales promotion of *Seikatsu*; the contents of this journal were too diffusive to gain many subscribers. After all, *Seikatsu* only lasted less than six years.

1　はじめに

大正期という時代は、都市新中間層の拡大を背景に、従来から見られた倹約を旨とした啓蒙だけでなく、日常生活の質的向上という要素を含んだ生活改善を人々に訴えかける事業が、様々に展開しはじめた時期であった。当時の都市部を主対象とした生活改善運動[1)]は、行政機関を背景とした活動（生活改善同盟会や世帯の会）や、民間非営利ベースでの活動（文化生活研究会、文化普及会等）等様々な形で展開された[2)]。

キーワード：生活改善，新中間層，マスメディア
Key Words : living condition improvements, new middle class, mass media
※　本学諸課程非常勤講師

また、これらの活動に先行する形で、婦人雑誌等による「生活をめぐる啓蒙」[3]も商業ベースで展開された。大正期以降の婦人雑誌は、一方では上述のような生活改善関連団体が後に扱う生活知識・技術を先駆的に取りあげる役割を果たし[4]、他方では、それらの団体が提示した改善項目を普及させる機能をも担っていた[5]。このように当時の婦人雑誌は、〈中流〉として名指された社会層（具体的には「中等社会」「中産階級」など様々な表現が当時併用されていたが）[6]を主要な対象とした大正期の生活改善運動と重要な関連を有するメディアであった。

他方で、これまであまり注目されてこなかった点であるが、この大正期には婦人雑誌とは異なるスタンスの雑誌が、「生活」を中心的な論題として刊行されていた。それが、当時を代表する有力な出版社・博文館から刊行されていた、『生活』（1913 年 7 月～ 1918 年 8 月）という月刊誌である。当時の商業メディアが「生活難」「簡易生活」といった問題に注目していくプロセスにおいては、最初から婦人雑誌的な形態によるもののみに収斂していたわけではなく、この『生活』のように（後世から見れば）試行錯誤の産物ともいえる形態も生み出されていたのである。本稿の結論を先取りするならば、雑誌『生活』は、同時代の人々の「生活」の多様性に着目してそれらを伝達し･論じる場を提供するという、婦人雑誌とはやや異なるスタンスを有するメディアであった。

『生活』を刊行していた博文館については、明治期の出版界を代表する存在の一つであったこともあり、その沿革に関する考察だけでなく[7]、看板雑誌である『太陽』の性格に関する考察[8]、関係者間のネットワークに注目した考察等[9]、多くの先行研究がある[10]。しかし、この『生活』については具体的な内容・位置づけに関する考察は皆無である。また生活改善運動やその周辺の事象を扱う諸領域の歴史研究（社会教育史、女子教育史、家政教育史等）においても、同誌の性格や位置づけについて言及されることはなかった。本稿では、「生活」の語を掲げた最初期の雑誌でありながら、従来注目されてこなかった同誌を主要な分析対象とし、その「生活をめぐる啓蒙」としての性格と位置づけを検討する。

以上を踏まえ本稿では、２.で、明治期の有力出版社・博文館が大正期において「生活」という概念に着目し、『生活』刊行に到るまでの経緯を、出版業界や読者層の変化、博文館内の人的要因等の点から概観する。３.では、『生活』の誌面分析を中心に、この雑誌における〈中流〉認識や、「生活」という問題領域の捉え方の特徴を明らかにする。それを踏まえて最後に ４.で、「生活をめぐる啓蒙」に関わる大正期のマスメディアの変容過程においてこの雑誌が占めていた位置を検討する。以上の考察においては、『生活』のほか、『地球』『家庭雑誌』『ポケット』等、『生活』と同時期またはその前後に博文館によって刊行されていた雑誌の内容とその推移も併せて、主要な検討対象としたい。

２．博文館の出版事業の展開と『生活』の刊行

（1）活字メディアによる「生活」への注目

明治末から大正期にかけては、〈中流〉の「生活難」を扱う議論がしばしばマスメディアで取りあげられるようになっていた[11]。このような当時におけるマスメディアの注目は、「生活」という語を書籍や雑誌の題名に冠する傾向として明確に生じていた（図 1）。一方、当時の読者にとってよりアクセスしやすいマスメディアである雑誌についてみると、「生活」の語を

題名に冠したものとしては、管見の限りでは『簡易生活』（簡易生活社、1906～1907年）がその嚆矢である。その後、明治後期には『新生活』（新生活社、1908年）、『我生活』（我生活社、1910年）等も刊行されているが、いずれも1年未満の刊行しか確認できない。

これらに比して『生活』は、比較的刊行が継続し（5年3ヶ月）、また大手出版社により刊行された雑誌としてとしてある程度の読者層の厚みが存在していた。この点で『生活』は、誌面分析を行う上でより高い資料的価値を有しているといえよう。

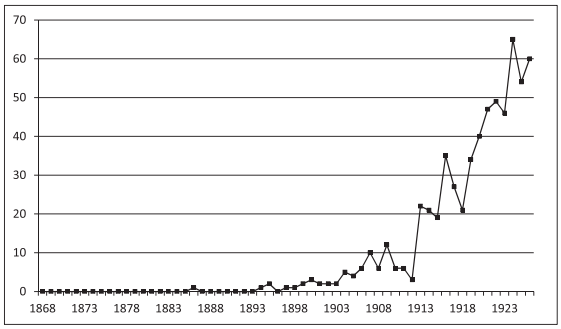

図1　「生活」を題名に含む書籍の刊行数の推移（実数）

図注：雑誌は含まない。
出典：国立国会図書館蔵書検索システムを使用して筆者作成。

（2）明治中・後期における博文館の隆盛と停滞

『生活』の刊行経緯、内容についての考察に入る前にまず、この雑誌が刊行される以前の博文館の沿革を概観しておこう[12)]。

博文館は、旧長岡藩の商家出身の実業家・大橋佐平（生没年　1835年～1901年）によって1887年6月に創業された出版社である。同社は『日本大家論集』の刊行（1887年6月）を皮切りに矢継ぎ早に多数の雑誌、書籍を刊行し、薄利多売を旨とする経営方針によって短期間の間に大手出版社へと成長した。1895年1月には、博文館は新たに『太陽』『文藝倶楽部』『少年世界』を創刊してそれらに経営の主力を集中する。特に『太陽』（創刊時の定価15銭。後述する『地球』『生活』創刊の時期においては30銭）は、分野別拡散型から集中型へ、という当時の博文館の出版・販売戦略を象徴する雑誌であった。『太陽』の誌面については、多様なジャンルの論説・記事を揃えたものであり、特定の思想的個性や文体上の統一性がなかったとも評されるが、その無性格さこそが、博文館の「百科全書派的な啓蒙主義」を象徴していたとも指摘される[13)]。

この『太陽』の読者層の中核は、永嶺重敏の指摘によれば、「都市部の中産知識人層」即ち都市新中間層であった[14)]。しかし、その後明治末期から大正期にかけて新中間層が急速に拡大し、また新中間層以外に工場労働者層等にも読書行動が次第に普及していった[15)]こととは裏腹に、『太陽』はむしろ読者ニーズや出版界の変化から取り残される局面が目立つようになっていった。即ち、『太陽』の全方位的な編集方針は、後発の諸雑誌に比べて明確な方針が見られず、整理されていない誌面、という印象を読者に次第に与えるようになり、また、主要な執筆陣についても時代の推移に伴う刷新が乏しかったのである[16)]。この停滞状況は、博文館の経営そのものの停滞とも連動していた[17)]。

（3）『生活』創刊の直接的な契機

上述のように読者層や出版業界の変化への対応で後手に回った博文館が、やや遅ればせながら環境変化に対応しようとする試みの一つが、本稿で扱う『生活』の創刊であった。

ここでは、同誌の刊行により直接的な影響を与えた経緯として、二つの要素に言及したい。

第一に挙げられるのは、同社の『太陽』と対をなす新雑誌として1912年4月に創刊された雑誌『地球』と、その後の経緯である。1912年に博文館は、『太陽』が従来十分にカバーできていなかった財政・経済関連領域を中心とした新たな総合雑誌を立ち上げた。それが、『太陽』と同型の判（四六倍判）で創刊された月刊誌『地球』である[18]（創刊時の定価は30銭）。

写真1　『地球』創刊号表紙（1912年4月号）

しかし、経済・財政問題に関する専門的記事中心の『地球』の誌面は、広範な読者を得るには明らかに敷居の高いものであった。早くも第1巻3号（1912年6月）には、「比較的容量の多き雑誌は、此際一段の工風と意匠と考案を費やして、一面には本来の実質を発揮し、一面には銷夏の材料たらしめざる可からざるものあるを思ふ」[19]と編集者によって記され、読者への親しみやすさを誌面作りにおいて意識し始めている様子が窺える。

とはいえ、財政・経済問題中心という創刊当初の基本姿勢もあり、編集方針の大幅修正は困難であったようである。結局、同誌はわずか1年3ヶ月で廃刊に至る。最終号では、専門的内容が広い読者層の獲得に至らなかった旨が、「時代は未だ此種の稍々専門に偏する真摯なる論議に耳を仮さざるか、将た吾人の努力未だ足らざるか、『地球』の声価識者の間に益々高きを加ふるに反して多数読者の要求と相容れず［……］」[20]と率直に記された。

従来からの看板雑誌『太陽』と双璧をなすはずであった『地球』の廃刊という事態は、専門特化ではなく、平易さによる読者へのアピールという対応を博文館に意識させることとなった。上記の「終刊の辞」の次頁には、翌月創刊予定の『生活』の広告が掲載され、「むづかしい理屈を言はぬ平易簡明の記事」「衣食住を中心とした実用文字の豊富」「肩の凝らぬ子供にも読める新工夫の図解」等と、内容の平易さを強調した宣伝文句が並んでいた[21]。このように、拡大する読者層に改めて寄り添おうとする際に、平易さを体現する要素として、「生活」という語が博文館の出版戦略において選択されていったのである。

『生活』の刊行に直接影響を与えたと考えられる第二の要素としては、特に博文館内のある人物の影響が看取される。同社の編集者で『生活』誌の編集兼発行人（1917年12月まで）を務め、一方で文芸評論家としての経歴も有していた、長谷川誠也（号：天渓。生没年　1876年～1940年）の影響である。

長谷川は、東京専門学校（後の早稲田大学）を卒業した後、1897年7月に坪内逍遙の紹介で博文館に入社している[22]。長谷川は在学時から心理学、自然科学、哲学に強い関心を寄せており、入社当初は史伝、家庭、地理、科学関連の記事を同社の雑誌に執筆していた。1901年に入ると、高山樗牛の「美的生活論」をめぐって積極的に発言し、自然主義文学に関する評論を文学雑誌や新聞紙上で展開するようになる。

長谷川の文学評論活動については、筆鋒の鋭さという点で当時の自然主義文学論において一種の存在感を有していたが、論の内容は独創性に欠け、道徳論的・常識的判断に留ま

ることが多く、また実際には評論の前提となる哲学・文学の知識も十分でなかった、という評価が一般的である[23]。その後、明治末年には長谷川の評論活動は停滞を迎えてしまう。

その後、長谷川の転機となったのが、社命による出版事業研究名目のイギリス長期出張であった（1910年6月～1912年10月）。この出張は、博文館が長谷川を幹部候補として見聞を広めさせるため命じたものであり、帰国後、長谷川は博文館の管理部に配属され、経営の一翼を担うこととなる。彼の文筆活動自体はその後も継続したが、その内容は文学評論からは離れ、基本的にジャーナリスティックな記事・論説が中心となっていった[24]。

帰国後の長谷川の文筆活動の具体的特徴の一つは、イギリス滞在時の経験に基づいた、経済思想の発達、生活の科学化に関する関心であった。当時、欧米滞在経験を得た日本人の多くが感じ取った、欧米と日本の生活水準の大きな懸隔を、長谷川もまた強く感じ取っていたといえよう。そしてその経験は素朴かつ直截に、生活の科学化の必要、経済思想の発達の必要に関する主張へと結びついていったのである[25]。この新たな著述活動の基底には、彼が学生時代から抱いていた自然科学への関心もまた伏在していたと考えられる。

長谷川は帰国直後から、「生活」への関心をいくつかの論説に著している[26]。その関心が博文館における出版活動において明確に反映されたのが、前述の『地球』の廃刊と入れ替わる形で創刊された『生活』であった。

3．雑誌『生活』と諸階層の「生活」 ― 誌面分析による検討 ―

（1）『生活』の刊行状況と誌面構成の概要

1913年7月より刊行された『生活』は、四六倍判、毎号140頁程度の分量で発行されていた（ただし刊行末期には、100頁近くまで分量が減少した）。創刊時の定価は18銭である（1916年4月より20銭に定価改定）。同誌の編集兼発行人となったのは前述の長谷川誠也であったが[27]、実質的に同誌の主任として編集の中心を担ったのは、同社の編集部に在籍した児童文学者・巌谷季雄（号・小波）の門下生で、自身も児童文学作品を多く執筆していた金子範二（号・紫草）であった[28]。

長谷川は刊行初期に「簡易生活」関連の論説をいくつか掲載したが、彼の論考は誌面の内容をリードしているという位置づけにはなかった。編集主任・金子範二は、『生活』誌上で最も多く（21本）論説・記事を執筆している。ただしその多くは「生活難」「簡易生活」に直接関連したものではなかった。その他、編集部の在籍者では、児童文学作家として著名であった前出の巌谷小波、『太陽』の初代主筆、博文館の編集局長等を務めた坪谷善四郎（号・水哉）等も、比較的多くの論説・記事を執筆している。しかしいずれも金子と同様、「生活難」「簡易生活」について専門的知見を有している執筆者ではなく、実際の執筆内容も「生活難」「簡易生活」に直接関連しないものが多くみられた（表1）。

写真２　『生活』創刊号表紙
（1913年７月号）

そもそも博文館内の人材全体の傾向として、得意とする執筆領域が文学方面に偏っていたということもあり、

表１　『生活』における編集部主要関係者（長谷川、金子、巌谷、坪谷）の論説・記事一覧

長谷川誠也（天渓）

年	巻	号	題名
1913年	1巻	1号	「複雑珍奇の複式生活」
		2号	「牝の蝉が鳴く頃に」
		4号	「生活難の救済論」
1914年	2巻	3号	「倫敦で暮した経験」

金子範二（紫草）

年	巻	号	題名
1913年	1巻	1号	「旦那芸」
		3号	「調和ある生活と茶」
		4号	「陸前松島の面目一新」
		5号	「磐城の鎌先温泉」
1914年	2巻	9号	「四日滞在した城崎温泉」
		10号	「山陰道の鉄道沿線」（※水谷如水と共著）
1915年	3巻	1号	「寄生々活者」
		2号	「不可抗力」
		4号	「徳富蘆花君の『恋の告白』の真実の分量」
		6号	「所謂新案家計簿に就て」
		7号	「戦争が建設する経済上の理想郷」
		9号	「小田原の海岸」
			「新生活索引」
1916年	4巻	2号	「百年後の世界」
		4号	「蓄電機の時代」
		5号	「伊香保の湯と居心地と」
		6号	「畳の力」
		7号	「腕白者」
		8号	「心配無用」
		9号	「四十万の横浜市民」
1917年	5巻	3号	「函根在句」
1918年	6巻	1号	「朝鮮征虎軍談」

巌谷季雄（小波）

年	巻	号	題名
1913年	1巻	1号	「紳士税」
		2号	「百食の譜」
		3号	「不安心帖」
		4号	「裏と表」
1914年	2巻	5号	「俳諧園遊会」
		8号	「すゞみ台」
		10号	「半戦時代の文明人」
1915年	3巻	4号	「混線」
		7号	「最近の日誌」
1917年	5巻	6号	「三十歳の時の私」
1918年	6巻	4号	「忙中閑遊の記」
		7号	「叡山詣」

坪谷善四郎（水哉）

年	巻	号	題名
1913年	1巻	1号	「旅館に対する不平一束」
		3号	「草津温泉入浴の朝夕」
		4号	「越中みやげ」
1914年	2巻	7号	「市議会議員選挙競争苦心の自白」
1915年	3巻	11号	「移民を歓迎する朝鮮の農作地」
1916年	4巻	9号	「新嘉坡と云ふ港」
		10号	「新嘉坡と云ふ港」

表注：俳句・川柳欄の選者として署名されているケースは除いた。
出典：『生活』各巻号をもとに筆者作成。

『生活』に関わった社内の執筆者は上述のように、実際の「生活難」「簡易生活」をめぐる当時の議論に必ずしも精通していなかった。このことは結果として、同誌が「生活をめぐる啓蒙」のあり方について、特定の方向を定めず、人々の「生活」の実態やそれに対する啓蒙の多様性を誌面の中に求めることにつながっていった。

また、社外の執筆者についてみると、「簡易生活」「生活難」問題に強い関わりを持つ論者としては、東郷昌武（文学博士。後に生活改善同盟会／中央会で理事等を務める）が比較的執筆本数が多い（7本）。しかし、当時、住宅改良会を中心に活動した橋口信助や三角錫子、後の生活改善同盟会／中央会と関わりの深い女子教育関係者の宮田脩、麻生正蔵、三輪田元道等については、各々１～２本程度である。むしろ、矢野恒太（7本、実業家・第一生命保険創業者）、宮川鐵次郎（6本、東京市助役）、千葉龜雄（15本、新聞記者・文芸評論家。誌上では号（莫愁生）の署名）、奥野他見男（9本、作家）、といったように、政財官界、文学界からの論者を多く用いていたことが同誌の特徴であり、後の生活改善運動に深く関わる住宅建築関係者、女子教育関係者らの論説の比重は小さかった。

この執筆陣の傾向は、誌面構成にも強く反映している。同誌の論説・記事は、「生活難」「簡易生活」を中核にしてはいたが、実際には、政財官界、華族、芸能界等の著名人の動向に関する記事、裁判実録、海外情勢、小説等、「生活」と必ずしも密接には関連していない内容も毎号のように多く掲載されていた。

また、『生活』では、記事・論説、俳句・川柳欄、謎解き、漫画、一口噺等の多様な形での投稿を読者に常時呼びかけていた。特に読者による論説の投稿は、同誌の誌面構成上不可欠な部分でもあった。読者投稿欄の名称や読者に求める投稿内容は刊行期間の中でも一定しておらず、編集部が度重なる試行錯誤を行っていたことが見てとれる。同誌において複数号に亘って掲載された読者投稿欄は表２の通りである。

『生活』誌の編集部は、誌面を豊かにする不可欠の要素として読者投稿を捉えており、誌上では投稿を募る告知が度々記された。例えば第１巻３号には、自らの家計に関する読者投稿を掲載した後に、「此処に掲げました様な実際の生活状態を寄稿して下さい。／千種万態の生活には皆それ〻の生活方法があることと思はれます」[29] と記されている。

表２　『生活』に設けられた読者投稿欄

読者投稿欄の題名	継続期間
「投書の中より」	第1巻3号～第2巻4号（1913年9月～1914年4月）
「壁訴訟」	第2巻9号～12号（1914年9月～12月）
「一家内の笑声」	第2巻9号～11号（1914年9月～11月）
「地方人の逸話」	第2巻9号～10号（1914年9月～10月）
「読者より」	第4巻1号～3号（1916年1月～3月）※
「読者の頁」	第4巻4号～12号（1916年1月～12月）
「読者に頒つた頁」	第5巻3号～4号（1917年3月～4月）※
「投書〇篇」	第5巻11号～第6巻5号（1917年11月～1918年5月）※

表注１：「読者より」は第２巻10号にも確認される。
表注２：「頒たれた頁」という語を用いて投稿を呼びかける記述は、第５巻１号から12号まで見られる。
表注３：「投書〇篇」の〇には採用された投稿数が入る。
出典：『生活』各巻号をもとに筆者作成。

ただし編集部の意図は「家計」「生活」にのみ焦点化されていたわけではなく、「面白い記事、家庭の実見法、失敗談、生活費軽減法、可愛い子供の話等、最も良いものには相応の謝礼を差上げます」[30] とも誌上に告知されていたように、より多様な内容の投稿が意図されていた。1917年には投稿規定に「頒たれた頁」との表記が現れ、「一部百四十頁の中を少くとも十頁だけ読者諸君に頒つ／任意の記事を寄せるべし」と、テーマ・内容を問わない投稿を求めることがさらに強調されていく[31]。

このように生活問題、特に家計問題を一応の核としつつ、「生活」の語とは必ずしも密接でない内容の記述が大量に盛り込まれているのが、『生活』の全体的な特徴であった。

（２）『生活』における〈中流〉の振れ幅

『生活』は誌面において、当時の生活難をどのように論じていたのであろうか。

まず、刊行初期の論説の特徴をまず概観したい。創刊号では、同号の主要論説として井上辰九郎（法学博士）による「生活費問題」が掲載され、物価騰貴の背景が論じられている[32]。創刊号ではまた、編集人・長谷川誠也が、西洋式と日本式が混在する「複式生活」の非効率性を指摘し、生活法を整理した「単一生活」を確立する必要を論じている[33]。

これらの「簡易生活」「生活難」に関する記事、論説は、「中等社会」「中産階級」等と表現される、いわゆる〈中流〉が問題の前提に据えられて論じられていることが多く、特に俸給生活者としての新中間層がそこでは主に想定されていたといえる。前掲の井上辰九郎の論説では、物価騰貴に伴う生活難について、「一定の収入に由りその生計を立てなければならない中等社会」が国民の中でも「尤も不利益の地位にある」と述べられている[34]。また、やや時期が下るが第２巻２号（1914年２月）では、「余裕ある生活法」という題に対する読者からの投稿が紹介されている。投稿の多くは、「月収取」「俸給取」即ち新中間層としての自身の生活を基に、家計の把握とその節約について述べているものであった[35]。その冒頭に紹介された読者投稿では、以下のように記されている。

「最近の生活難は下層 —— 労働者階級ばかりに止まらず、犇々と中層階級までも襲つてきた。[……]却つて下層階級 —— 貧民などは苟安といふ点からいふと上層階級の次で、極めて割合が好いが、上と下とに抑付けられて、帯にや短し襷にや長しで一番苦痛を感

じてニツチもサツチも行かないのは、此の国家として最大緊要な中産階級である。そこで私もこの中産階級に属する一人として毎日行つてゐる実際の余裕ある生活方法を社会に公表したいと思ふ。」[36]［下線引用者］

このように『生活』では、〈中流〉（特に新中間層）の存在を核として「生活をめぐる啓蒙」が論じられていた。その論じられ方は、「社会の中堅・主導層」であるはずの〈中流〉が、同時に、生活難という観点から語られるという構造を有していた。

他方、生活難や簡易生活を扱った記述を詳しく見ると、記事・論説内で前提とされている生活水準には、かなりの幅があったことが窺える。家計の指針を提示する啓蒙的内容の論説においては、想定される生活水準が相対的に高く設定されているケースが多い。例えば長谷川誠也「生活難の救済論」（第1巻4号、1913年）では、生活用品を単に安価な材料で間に合わせるのではなく、必要な量を見定めて材料の浪費を省き、「最善のものを、最も有効に使用すると同時に無駄を省く」ことが推奨されている。しかしここで留意すべきは、長谷川が挙げる具体例である。長谷川は、「牛肉を買ふに当りて、ロースの代りに上等肉にする必要はない。矢張ロースで宜しいが其の代り牛肉幾許の量で人一人が十分に営養分を取ることが出来るかを定め［……］」「たとひ倹約した気でも家族の数には多すぎる程の上等肉を買つては却つて損が多くなるのだ」と論を続ける[37]。しかし当時の牛肉の平均小売価格を考えれば[38]、長谷川のいう「無駄を省く」議論は実際には、新中間層の中でも相当裕福な層を念頭に置いていることが明らかである。

また、「上流階級」に属すると自認するものが、自らの家庭での生活上の工夫について、〈中流〉向けに安価に取り組むことを勧める記事も見られる[39]。例えば、伯爵・小笠原長幹の執筆した第4巻1号（1916年）の論説では、テーブルデコレーション（洋風食卓の上に施す箱庭様の装飾）が材料の工夫で安価に用意できることが述べられている。しかし、そもそも当時、このような装飾が可能な大きさの食卓が新中間層（特にその中・下層）に一般的に用いられていたとは考えにくい。

他方、『生活』誌上において読者の家計の実態が読み取れる記述からは、新中間層の中で相対的に生活水準の低い層も同誌の読者になっていることが窺える。これに関して、同誌において読者が自身の家計状況について投稿し、掲載された記事のうち、「月給」（「月収」ではなく）として収入状況が明記されたものを抽出したものが表3である。この表を見ると、読者の生活実態として『生活』に寄せられた投稿においては、月給が50円に満たない事例がほとんどであった。ちなみに、1910年の判任官俸給令では1級俸から11級俸までが設定されており[40]、ちょうど中間の6級俸は月額45円であった。もちろん、表3に示した投稿はあくまで編集部のフィルターを通して挙げられた事例であるという留保は必要であるが、同誌の新中間層読者の多くは、所得水準が相対的に低い中・下層に該当するものであったことがここから示唆されるだろう。明治末から大都市部の新中間層は急速に拡大を見せるが、その拡大は基本的に新中間層の中・下層の拡大であり[41]、そのことがこの投稿の傾向にもある程度反映していたとみられる[42]。

「生活」のあり方を提唱する側と読者の側との前提の「ずれ」が、明確に表面化することもあった。第3巻7号（1915年）に掲載された嘉悦孝子の論説（「生活程度を低める要領」）では、「家賃を節する事」「郊外へ引き移るが宜い」「なる可く女中廃止」「買物は総て現金」

表３　『生活』誌上における「月給」生活者の読者投稿による家計記事

年	巻	号	投稿者名	題名	投稿者の職業	家計状況
1913年	1巻	2号	尾花進一	（無題）	会社勤務	月給18円（賞与10円）　月支出28円
			牧友二	（無題）	商店通勤	月給20円　月支出15円
			ES生	（無題）	会社勤務	月給40円　月支出42円45銭
		3号	泰山生	祖先の恩沢	学校勤務	月給75円（不動産所得除く）　生活費99円
		6号	丹治生	書生上りの独身者	会社員	月給24円（賞与あわせた月収40円）
			江頼	十二円の月給	小学校教員	月給12円（その他あわせた月収13円）　月支出10円20銭
			浪介生	三円の家賃	役所勤務	月給28円　月支出28円
1914年	2巻	1号	東善坊	田舎の教員	小学校教員	月給16円（加俸あわせて月収20円）　月支出11円
		2号	雪巒生	（無題）	地方郡衙の小吏	月給35円　月支出34円
			山下清流	（無題）	田舎教師	月給22円（住宅料あわせて月収23円）　月支出17円50銭
		3号	庄倉紫怨	十五円の生活	会社勤務	月給15円　月支出13円～14円
		4号	富田翠花	夫婦者の廿五円	ー	月給23円　月支出20円
			竹影生	台湾の官衙より	官庁勤務	月給30円　月支出30円
			亭童子	上毛の農村より	小学校教員（兼業農家）	月給22円（農業収入等あわせて月収142円（平均）） 月支出66円（平均）
		6号	（無署名）	市内生活と市外生活との損益の実際計算	俸給生活者	月収37円65銭　月支出30円23銭　※
1916年	4巻	8号	エツチ、オー生	地方新聞記者	新聞記者	月給10円（その他あわせて月収15円）
		12号	一給仕	小銀行の給仕	給仕	初年月給4円
1917年	5巻	1号	鐵響生	汽車機関手となる迄となつてから	機関手（判任官待遇）	月給35円
			星千歳	地方の小官吏の楽	地方官吏	月給18円81銭（その他あわせて月収26円81銭）　月支出22円81銭
		5号	度来波	タクシー自動車の運転手	貸自動車運転手	月給30円
		9号	一腰辨	北海道に於ける薄給官吏の生活	札幌区の官吏	月給20円　月支出18円60銭

表注１：投稿者自身の家計について記述した内容に限ってとりあげた。
表注２：※について、文中には「月収」と書かれているが、内容から明確に俸給生活者であることが分かる投稿も、表に挙げている。
出典：『生活』各巻号をもとに筆者作成。

等の新中間層を主対象にしたと考えられる提言がなされている。しかしこれに対し、翌月号に読者からの反論が掲載された。この反論では、例えば嘉悦が「家賃一割説」（家賃を月収入の一割以内にすべきとする提言）[43] を唱えたのに対して、「二十円しか収入のない人」も存在するのであり、そのような人は「どうしても生活費が高率になる」と述べられている。この反論では、「二円や三円で借りられる家があれば結構でございますが、当地［大阪：引用者注］には迚も其のやうな安い家はありません」「現に妾（わたし）の家は月収三十五円ですが家賃はその二割を支出しております」と、嘉悦の提案の非現実性への指摘が中心となっている[44]。確かに嘉悦の提言には、「百円の月収のある家庭では精々十一円位、八十円の家庭では八円の家賃に甘んじて［……］」「妾（わたし）の学校の卒業生で月収百円内外の方は［……］」[45] という記述が各所に見られ、彼女を批判した読者とは、そもそも想定している所得水準が大きく異なっていた。

同誌にはまた、適切なパン（「麺麭」）の普及が進めば簡易的な朝食が普及する、というある工学博士の議論が掲載されたこともあった[46]。これに対して読者からの寄稿として、「博士の様に上等の生活をされて居る人には或は西洋式の朝餐の方が従来の方法よりは廉に上るかも知れぬ。しかしこれとても同程度のものにしたらやはり日本食の方が廉いだらうと思ふ」「畢竟博士は自己の厨房から打算して麺麭式を推奨さるゝので、少しも下級生活に就て観察されぬからこんな考を生ずるのであらう」という批判が寄せられていた[47]。

このように『生活』の記事からは、家計のあり方を啓蒙する側の想定した生活水準を大きく下回る人々が読者に相当数存在していたことが窺える。同誌における「生活をめぐる啓蒙」の言説は〈中流〉の生活を核として展開していたが、明治末から大正にかけてその前提となる〈中流〉の生活水準自体に大きな格差が生じたため、「啓蒙する側」と「啓蒙される側」との間でそれぞれ想定する生活水準の明白な差異となって現れていたのである。

ただし、そのような〈中流〉の理解をめぐるずれは、同誌において提示された「生活」の多様性のあくまで一部であった。また、そのずれの意味が、誌上での議論としてそれ以上深く突き詰められることもなかった。

（3）網羅的に捉えられた「生活」

以上のように『生活』においては、〈中流〉を中心にして「生活をめぐる啓蒙」を展開しつつも、その〈中流〉がどのような層を指すかについては一定の振れ幅が存在した。このことに加え、同誌の誌面の全体的傾向をみると、〈中流〉だけでなく多様な職業者の生活を網羅的に記述しようとする志向が見て取れる。

例えば、同誌において自らの家計に触れた読者投稿のうち、「月給」という語の記されていないものを一覧にしたのが、表4である。誌上で取りあげられた投稿数としては、表3で示した、「月給」生活者（＝新中間層）のそれよりもやや少ないが、『生活』が新中間層以外の家計にも一定の関心を持っていたことがうかがえる。これに関連して、読者投稿やそれ以外の記事においては、ある特定の職業における様々な職位・経験とそれに対応した収入の実状を細かく説明する記述も度々見られた。

そもそも同誌においては、言及される社会階層が多様であっただけでなく、「生活」の語自体についても、家庭・家計という領域に特化したものではなく、より多様性を含む概念として位置づけられていた。これに関連して、同誌において「生活」の語を題名に含む記事・論説を一覧にしたのが表5である。この表を見ると、衣食住等日常生活の知識・技術に関する記事・論説や、家計に関する記事・論説等が多数ではあるが（「簡易生活」「複式生活」「郊外生活」「生活難」等）、職業人としての生き方という視点で「生活」を捉えた記事・論説（「海上生活」「鉱山生活」「宿屋の客引の生活」等）が比較的多いこともみて取れる。

このような同誌の編集方針は、家庭生活における実用志向の実質的な低さとしても現れていた。『生活』から2年後に同じ博文館が創刊した婦人雑誌である『家庭雑誌』（1915～1926年。創刊時の定価10銭）と比較してみよう。図2は、『生活』、『家庭雑誌』両誌の記事・論説内容について、家庭生活の実用的知識・技術に関する内容が主となる論説・記事のページ数の割合を、『生活』の刊行時期（1913～1918年）に限定して算出したものである。『家庭雑誌』の誌面は、「我家の経済」（1916年からは「社会百生活」）として掲載された家計記事や、簡易生活の理念、具体的な家庭技術、知識、「法律問答」「衛生問答」等の質問回答欄、実話・小説等の読物等で構成されていた[48]。『家庭雑誌』または同時代の他社の「実用派」婦人雑誌と比較すると、『生活』は明らかにその焦点が不明確であった。同誌は「生活」という概念に関して、家庭生活の技術・知識をその核として捉えていたわけではなく、「生計」「家計」のイメージを大まかに核としつつも、様々な職業、社会階層を反映した人間の暮らしの多様性を「生活」という語を通じて表そうとしていたのである。

表4　『生活』誌上における「月給」生活者以外の読者投稿による家計記事

年	巻	号	投稿者名	題名	投稿者の職業	家計状況
1913年	1巻	4号	衣笠生	鉱山生活	鉱山の製錬職工	月収23円40銭　支出23円40銭
1914年	2巻	2号	なにがし	米価騰貴の余沢	自作農	月収75円（平均）　月支出65円（平均）
		4号	信濃雲峰	信州の寒村の農民	農家	月収80円（平均）　月支出58円（平均）
			腰べん生	日給者の生活費軽減法	官庁勤務（日給制度）	月収20円（日給65銭）　月支出22円
		6号	嘉穂生	福岡の炭坑より	炭坑労働（夫婦）	月収38円54銭　月支出29円59銭5厘
		7号	松風	損料貸と最小規模の店出した経験	官庁勤務（日給制度）	日給75銭（内職あわせて月収21円）
			頓吉	備中の小作人より	小作農	月収16円17銭（平均）　月支出10円32銭5厘
		10号	杏堂生	吾家の貯金日	商家	月収30円（最も閑散な時　平均41円）　月支出30円
1915年	3巻	2号	濱名兼三	薄給者の台所	職工	日給78銭（その他あわせて月収入40円） 月収入22円50銭　月支出17円68銭
		3号	雲峯生	純益二十四円を超さぬ小百姓	農蚕兼業	収入61円（平均）　支出59円（平均）

表注：投稿者自身の家計について記述した内容に限ってとりあげた。また、職業が明記されている投稿のみ挙げている。
出典：『生活』各巻号をもとに筆者作成。

表５　『生活』誌上における「生活」の語を題名に含む記事・論説

年	巻	号	著者名	記事・論説題名
1913年	1巻	1号	井上辰九郎	生活費問題
			八代六郎	海上生活
			長谷川天渓	繁雑珍奇の複式生活
			ー	本誌に対する批評と吾が生活
		2号	志田鉀太郎	吾が家の田園生活
			湯原元一	都会の共楽生活
			ー	生活の実際
			ー	吾が生活
		3号	矢野恒太	簡易生活論
			金子範二	調和ある生活と茶
		4号	波多野承五郎	積極的生活の意義
			長谷川天渓	生活難の救済論
			依田信太郎	憂鬱症と生活難
			芙蓉生	鉱山生活
		5号	本間龍胤	来る可き電気時代生活
		6号	日野三郎	蝸牛の愛の生活
1914年	2巻	1号	平塚明子	私には親しまれぬ現代社会生活
			安部磯雄	課税が及ぼす生活難
			ー	余裕ある生活法
		2号	新渡戸稲造	都会生活と地方生活
			田中穂積	予算の無い日本人の生活
			ー	余裕ある生活法
		3号	志村源太郎	化石化したる現代生活
			庄倉紫怨	月十五円の生活
		4号	ー	生活の鍵
			横井時敬	生活費軽減の三策
			村田俊彦	義太夫趣味の日常生活
			腰べん生	日給者の生活費軽減法
		5号	山路愛山	生活は放任主義に限るの説
			隅田伊賀彦	簡易生活よりも簡易執務
			ー	女優の生活難と収入
			白眼道人	郊外生活を更に趣味あらしめる一動物
		6号	ー	郊外生活と市内生活の損益の実際比較計算
		7号	波多野承五郎	生活難と一家の主婦の改造
			浮田和民	世界の最新思潮と実際生活
			山田三良	生活の充実と日蓮上人の教義
		9号	小川千甕	理想の生活
			中村嘉壽	単独生活の真意義
			【大項目名】	新生活
			ー	二重生活
			【大項目名】	新生活に対する読者の主張
			軒声	科学と新生活
			汾濤生	愉快な生活
			宮田脩	甘みのある新家庭生活
		10号	薄井秀一	性欲の簡易生活
			野の人	郊外生活の愚
		11号	柳家小さん	今の落語と落語家が自ら招く生活難
			ー	本年の吾が生活
		12号	三輪田元道	情操生活と個人の幸福
			ー	本年の我生活
			川上昌保	新生活者の健康
			金子範二	寄生々活者
			波多野承五郎	新生活者が択む可き家庭の娯楽
			ー	生活費軽減の二大眼目
			汾濤生	生活の単純化と科学化
1915年	3巻	7号	佐々醒雪	張つめた生活をする者の行末
			嘉悦孝子	生活程度を低める要領
		8号	吉岡銀子	実行し難き『嘉悦先生の生活費低減案』
		9号	野の人	生活難を知らぬ日本画家の豪奢
			古谷久綱	篭城の用意の為の郊外生活
			五十嵐力	半農生活が産出する愉快と健康
			金子範二	新生活索引
		10号	江原素六	生活難の避難所
		12号	挑運河	生活難で変死した者と個性の維持
1916年	4巻	1号	【大項目名】	日常生活の新趣向
			ー	生活費に充つ可く全国の農民が借りた金
			エヌ、ワイ生	生活難を知らぬ汽車の車掌
		2号	平林武一郎	田園生活の第一条件
			英塘翠	台湾在住の内地人の生活難の叫
		3号	武内久衛	非近郊生活
		4号	白金冠	米国の富豪連の簡易生活法
			濱名兼三	郊外生活者の矛盾
		6号	宮川鐵次郎	東京の郊外生活の不安
		8号	某理学博士	各遊戯の効率と現代生活
		9号	熱沙丘	日常生活の神経件と新智識
			泡沫子	都会生活と朦朧会社の重役
		10号	葉村生	郵便集配人の実生活
1917年	5巻	1号	堀江歸一	戦争終局後の日本の生活状態
			【大項目名】	実行し得うる新生活法
			加藤正治	二重生活から出た新経済生活
		2号	左近義弼	不経済な純洋風から考案した折衷生活
		3号	三木善八	すまじきものは『郊外生活』
		5号	小形青村	都会生活と宗教
		7号	添田壽一	生活費軽減策論
		8号	老巷子	独身者の飯屋生活
		9号	札幌一腰弁	北海道の薄給官吏の生活
			小野弘	宿屋の客引の生活
		11号	池邊釣	郊外生活の便不便
		12号	山脇玄	余の実行せる経済的生活法
1918年	6巻	4号	鈴木梅太郎	安価生活より理想生活
			莫愁生	生活難か生殖難か
		8号	拓堂生	生活費の百分率研究

表注：第４巻１号から第５巻５号まで掲載されている「生活笑話」欄は除いた。
出典：『生活』各巻号をもとに筆者作成。

このことは、同誌が誰に向けて・何を発信しているのかが読者に伝わりにくいという結果をもたらしていた。例えば刊行初期の投稿において既に「余り漠として、どんな人が読むのやら判らない様な気がします。一般向けと云ふ御考ではありましようが或る程度迄は範囲を定めては如何でしよう」「花月の料理とて、滅茶苦茶に重箱に詰め込まば旨味を減ずべし。誌面を緊張せしめ記事の配置に塩梅をつくべし」等の指摘がみられる[49]。いずれも同誌の性格をいみじくも言い当てていた。第５巻10号以降同誌の表紙に記される副題が「奇聞と事実と趣味」になるが、これは同誌の拡散的性格を追認したものでもあった（写真3）。

網羅主義的な同誌の傾向は、『太陽』以来の博文館の雑誌編集のありようを受け継いだものであった。ただしそれだけではなく、〈中流〉を見すえつつも多様な社会階層の「生活」に注目することで、雑誌読者層の広がりに対応しようとする態度であったとも言える。もともと『生活』創刊号（1913年７月）の巻頭言では、以下のように述べられていた[50]。

「［……］本誌は時には笠を冠り時には考へ時には感じて無限の変化ある万物の生活を写します［。］理屈一方に偏するも愚［、］復俗に媚びるも醜い［。］ですから左様でなく老少貴賤万人の賢い親友となりませう」

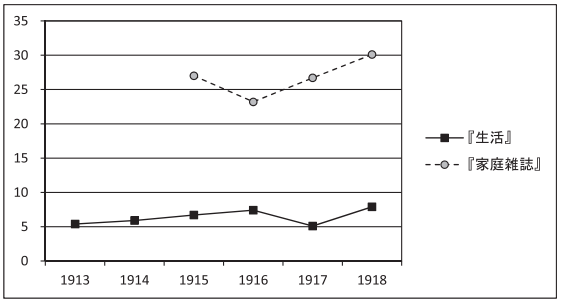

図２　実用的生活記事の総ページ数における割合（『生活』、『家庭雑誌』）（%表示）

表注：広告、巻頭の画報など頁番号の振られていない部分は総ページ数としてカウントしていない。
出典：『生活』『家庭雑誌』各巻号（1913～1918 年）をもとに筆者作成。

写真３　『生活』第５巻 10 号表紙（1917 年 10 月号）

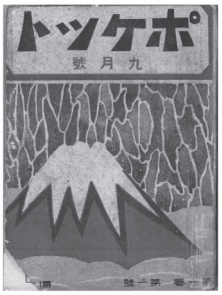

写真４　『ポケツト』創刊号表紙（1918 年 9 月号）

博文館は読者層の拡大に対応するため、「生活」という視点を選び取った。しかし、実用的知識・技術に特化しない、「万物の生活を写」すという『生活』の当初からの姿勢は、結果的に雑然とした内容と誌面構成を生み出していた。したがって、同誌が想定する読者像も拡散したものとならざるをえなかったのである。

（4）『生活』の廃刊

『生活』は結局、1918 年 8 月号をもって廃刊となった。最終号の末尾には、「博文館は新しい雑誌発行の計画を立て、其のために大努力をなさねばならぬ事になりましたので、遺憾ながら『生活』を廃刊することとなりました」と廃刊理由が記される[51]。これと入れ替わりに同社から創刊されたのは、月刊誌『ポケツト』（1918～1927 年。創刊時の定価 10 銭）である。同誌は「家庭小説、歴史小説、探偵小説、裁判実録等」を目玉とする「読物本位の雑誌」[52] として刊行されていく。『生活』刊行末期に副題が「奇聞と事実と趣味」となっていた（前述）ことは明らかに、「読物本位」を謳う『ポケツト』の刊行の伏線でもあった。いわば『生活』は、「生活をめぐる啓蒙」の側面を『家庭雑誌』に、「読物」による娯楽提供の側面を『ポケツト』にそれぞれ譲り渡し、自らの役割を終えたのである。

４．おわりに

本稿では、大正期に刊行されていた博文館の月刊誌『生活』をとりあげ、その刊行の背景の検討や同誌の誌面分析を通して、当時のマスメディアによる〈中流〉認識や「生活」という問題領域の把握の一端を考察した。

雑誌『生活』の存在は、大正期のマスメディアにおいて、（婦人雑誌に典型的に示されるような）新中間層の「生活」への視線だけでなく、多様な社会階層の「生活」に注目する視線もまた存在していたことを示すものでもあった。ただし、同誌はあまりに幅広く「生

活」を捉えようとした代償として、内容、想定される読者層いずれの観点から見ても、商業雑誌としては拡散的で位置づけの曖昧な存在になってしまった。これとは対照的に、新中間層を主対象として家庭生活の実用的知識･技術を重視した婦人雑誌の形態は､商業ベースでの「生活をめぐる啓蒙」の重要な一翼を担っていくこととなる。当時の「実用派」婦人雑誌は､同じく「生活」に注目しつつも､拡大しつつある読者層の中核たる新中間層（特に中･下層）を主対象として、かつ他階層ともある程度の通有性がある、家庭の実用知識･技術を「生活」の実態として扱っていったのである。

この時期の博文館による『生活』の刊行は、雑誌読者層の拡大と変質、特に、雑誌読者の中核とされる〈中流〉の変容（明治末期以降の新中間層中・下層の拡大）への同社なりの対応であった。しかし､「生活」を中心に展開した博文館の試みは、対象層や内容の方向性を一挙に拡大させすぎたものとなり、結果的には短期間で挫折した。『生活』はその題名の通り､「生活」という視点から読者へのアプローチを先駆的に行いつつも、明治後期から「簡易生活」の担い手とされていた〈中流〉の内に生じていた格差の意味を突き詰めることはなく、また同時期の商業的婦人雑誌のようにその〈中流〉の変質という状況[53]を読者獲得戦略へ反映させることもなく、まさに「生活改善」の語が人口に膾炙するようになった大正後期において、その刊行に幕を閉じたのである。

付　記

本研究はJSPS科研費（課題番号：24531006、及び、課題番号：16K04550）の助成を受けたものである。

注

1）大正期日本の特に都市部における生活改善運動の全体像について扱った研究の中でも代表的なものとしては、中嶌邦「大正期における『生活改善運動』」『史艸』第15号、1974年、小山静子『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房、1999年等。

2）これらの団体における事業の性格の推移を明らかにしたものとして、久井英輔「戦前の生活改善運動における「知識」と「実行」：生活改善同盟会／中央会の性格とその変容に関する一考察」『日本社会教育学会紀要』第42号､2006年､同「「中流階級」「知識階級」へのまなざしとその変容：大正後期・昭和初期の文化生活運動が意味するもの」『広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部』第60号、2011年、同「「世帯の会」による生活改善運動：大正期の商工行政を背景とした社会教育事業の動向」『広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部』第62巻、2013年。

3）本稿では、人々の生活のあり方の変化を目指す様々な取り組みを包括的に示す概念として､「生活をめぐる啓蒙」という語を使用している。これに対し「生活改善運動」という語については、その形態が比較的に組織的であり、かつ、その掲げる理念に生活の質の向上への志向を内包させた取り組みを指す語として限定的に用いている。

4）小山、前掲、67-76頁。

5）竹田喜美子・加藤久絵「「婦人之友」にみる生活改善運動（1919-1933年）の展開：中流階級の暮らしに与えた影響」『学苑・近代文化研究所紀要』第815号、2008年、大橋若

奈・夫馬佳代子「雑誌『主婦之友』にみられる大正期の生活改善（2）：掲載記事における生活改善運動の影響」『岐阜大学教育学部研究報告　人文科学』第59巻1号、2010年。

6）以下、本稿で〈中流〉と記す場合、社会階層の観点から見た特定の社会集団（例えば都市新中間層）を客観的に指すのではなく、本文で記したように「中等社会」「中産階級」等、「社会の中で中間の位置づけにある集団」として語られた対象を包括的に示す概念として用いている。

7）坪谷善四郎『博文館五十年史』博文館、1937年、彌吉光長『未刊行資料による日本文化（第5巻）　近代出版文化』ゆまに書房、1990年、431-477頁、田村哲三『近代出版文化を切り開いた出版王国の光と影：博文館興亡六十年』法学書院、2007年。

8）鈴木貞美編『雑誌『太陽』と国民文化の形成』思文閣出版、2001年。

9）土居安子「南部書簡から見た博文館：館員（元館員）からの書簡を中心に」『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』第27号、2014年。

10）博文館関連の歴史研究の1990年代までの概要として大久保久雄「博文館研究資料年表（一八八五－一九九四年）」『東海大学紀要（課程資格教育センター）』第4号、1994年。

11）久井英輔「大正期の生活改善における〈中流〉観の動向とその背景」『広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部』第61巻、2012年、30頁。

12）博文館の沿革に関しては坪井、前掲、彌吉、前掲、田村、前掲を主に参照した。

13）鈴木貞美「明治期『太陽』の沿革、および位置」鈴木編、前掲、13-16頁。

14）永嶺重敏『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部、1997年、124頁。

15）永嶺重敏『モダン都市の読書空間』日本エディタースクール出版部、2001年、161-164頁。

16）鈴木、前掲、28-32頁。

17）博文館の出版事業が停滞した要因としては、出版企画力の低下だけでなく、他社が雑誌の返品自由制へと切り替えていく中で、買切制（書店からの返品を認めない）を博文館が継続していた点も挙げられる。田村、前掲、145-148頁。

18）坪谷、前掲、229頁。

19）『地球』第1巻3号、1912年、248頁。

20）「終刊の辞」『地球』第2巻6号、1913年、130頁。

21）「空前の新雑誌　生活」『地球』第2巻6号、1913年、131頁。

22）長谷川の博文館入社までの経緯については、畑實『自然主義文学断章：天渓・花袋・春雨・宙外』公論社、1979年、2-24頁。

23）長谷川の文学論に関する先行研究としては、田中保隆「長谷川天渓」『国文学　解釈と教材の研究』第5巻10号、1960年、駒尺嘉美「自然主義理論における一つの問題点：長谷川天渓」『法政大学文学部紀要』第10号、1965年、吉田精一「長谷川天渓（1）・（2）」『国文学　解釈と鑑賞』第37巻13号、15号、1972年、畑、前掲、41-59頁等。

24）長谷川の文学評論の停滞と英国出張の経緯については、瀬沼茂樹「長谷川天渓の洋行：日本文壇史第二百二十三回」『群像』第28巻6号、1973年、畑、前掲、87-103頁。

25）帰国した後の長谷川の著述活動の概要については、畑實「長谷川天渓：大正初期の評論活動」『国文学研究』第78号、1982年。

26）長谷川天渓（誠也）「人生の科学化」『読売新聞』1913年1月5日朝刊、6頁、同「科学の圧迫と人生」『読売新聞』1913年7月13日朝刊、6頁等。

27）第 5 巻 7 号以降は、同誌の編集助手だった濱田徳太郎が編集・発行人となっている。
28）南部亘国『回想の博文館』日本古書通信社、1973 年、54-55 頁。
29）「投書の中より」『生活』第 1 巻 3 号、1913 年、107 頁
30）「投書を求む」『生活』第 1 巻 5 号、1913 年、143 頁。
31）「投稿規定」『生活』第 5 巻 1 号、1917 年、216 頁。
32）井上辰九郎「生活費問題」『生活』第 1 巻 1 号、1913 年。
33）長谷川天渓（誠也）「繁雑珍奇の複式生活」『生活』第 1 巻 1 号、1913 年。
34）井上、前掲、16 頁。
35）「余裕ある生活法」『生活』第 2 巻 2 号、1914 年、86-91 頁。
36）同上、86 頁。
37）長谷川誠也「生活難の救済論：避妊論と簡易生活論の可否」『生活』第1巻4 号、1913 年、48-49 頁。
38）1922 年段階で牛ロース肉の平均小売価格は 100 匁（約 375g）あたり 1 円 60 銭、同年の小学校教員の初任給が 40 ～ 55 円である。森永卓郎監修『物価の文化史事典　明治／大正／昭和／平成』展望社、2008 年、64 頁、398 頁。
39）小笠原長幹「中流社会の食卓装飾」『生活』第 4 巻 1 号、1916 年。
40）「判任官俸給令」（明治 43 年勅令第 135 号）の別表による。
41）田沼肇・野田正穂「サラリーマンの歴史」松成義衛・泉谷甫・田沼肇・野田正穂『日本のサラリーマン』青木書店、1957 年、31-32 頁。
42）表 3 における事例が後に減少したのは、同内容の投稿欄が 1915 年から博文館が刊行した『家庭雑誌』（本文で後述）に設けられたことも影響していると思われる。
43）嘉悦孝子「生活程度を低める要領」『生活』第 3 巻 7 号、88 頁。
44）吉岡銀子「実行し難き『嘉悦先生の生活費低減案』」『生活』第 3 巻 8 号、89-90、92 頁。
45）嘉悦、前掲、89-90 頁。
46）鴨居武「麺麭の改良と街路の改修：簡易生活の第一歩」『生活』第 2 巻 8 号、1914 年。
47）服部耕石「鴨居博士の『麺麭の改良』に就て」『生活』第 2 巻 10 号、1914 年、92 頁。
48）『家庭雑誌』はその後文芸中心へとシフトし、1921 年以降その傾向が顕著となる。
49）「本誌の批評」『生活』第 1 巻 2 号、1913 年、114-115 頁。
50）『生活』第 1 巻 1 号、1913 年、1 頁。
51）「廃刊の辞」『生活』第 6 巻 8 号、1918 年、112 頁。
52）『生活』第 6 巻 8 号、1918 年、103 頁。
53）ここでいう〈中流〉の変質とは、〈中流〉とされてきた社会層（主に新中間層）の中での格差拡大（特に中・下層の拡大）だけでなく、〈中流〉をめぐる語られ方が大正期から昭和初期にかけて変化していったことを指している。すなわち、〈中流〉が公共的存在としての意味を帯びた「社会の中堅・主導層」として語られるよりも、生活の便利さ・豊かさを求める私的存在としての意味を帯びた「個別化した生活者」として語られるケースが、大正後期から昭和初期にかけて増えていったのである。このような新中間層の中・下層の拡大、また、〈中流〉言説自体の変化に敏感に対応したのが、当時の商業婦人雑誌であった。この点について詳しくは、久井英輔「「生活改善」のメディアとしての婦人雑誌と〈中流〉をめぐる言説・実践：大正・昭和初期における変容の構図」『教育科学』第 30 号、2015 年参照。